



沖縄県

八幡喜美男さん・万里子さん

取材者：NPO法人まちなか研究所わくわく 宮道・下地
取材日：8月9日

地に足つけて、心をひとつに前へ進みましょう

権現堂字蛭子町では、地元で取れる魚をメイン料理とした居酒屋「北のだいどころ」を経営。お店の仕込み中に震災にあった。3月12日には、親戚を頼り埼玉県へ避難。その後、娘夫婦とともに沖縄へ渡り、現在は沖縄県糸満市で夫婦二人で生活をしている。



▲喜美男さんと琉球かすり織りに励む万里子さん

■避難先沖縄での忘れられない朝ごはん

3月末に、娘夫婦と沖縄に避難した。だけど、沖縄に親戚や友人がいるわけでもなく、どこに行ったらいいのかわからなかった。情報を求めて県庁に行ったら、那覇市の赤嶺団地自治会長さんと出会い、すごく親切にしてもらった。次の日から団地に入ることができ、孫の小学校の手続きから掃除や費、布団、食べ物の準備まで、PTAや婦人会、同じ団地の方々にやっていただき本当によくしてもらった。

た。お隣の方が「これ作ったから食べて」と、朝ごはんはたたくさんのおにぎりとスパムと卵焼きを持ってきてくれたときは、本当にうれしくて涙が出たよ。一生忘れられない。

■琉球かすりとの出会い

知らない土地で何もなかったら気持ちも暗くなるけど、私（万里子さん）は、琉球かすりという織り物と素晴らしい出会いをした。初めてかすりに触れたとき「すごいな、いいな」。織ってみたい！と思っていたら、縁あって織りをさせてもらえることになった。おもいつきり糸に触らせてもらって、教えてもらって、毎日がわくわくドキドキ。これから反物も織らせていただけたらいいなという目標がある。

■育ててもらった浪江町

浪江町は、山の物も海の物もおいしい食卓のまじり。魚は、ヒラメ、オコゼ、カワハギ、フグ、タイ、カレイなどが豊富にとれる。浪江町で居酒屋をやっていたときは、魚の料理がメインだった。オコゼやカワハギ、

生ダコの薄造りとかね。ビールと一緒に出していたんだよ。うちのビールはおいしいってお客さんにも言ってもらって：懐かしくて涙が出そう。浪江町は、一生懸命やる人をすごく応援してくれる情の厚いまちで、30年住んでいた私たちは本当に浪江町に育ててもらった。何度、浪江のみなさんに助けてもらったかわからない。浪江町に骨をうずめるつもりでいたのに、まさか沖縄に避難する日がくるなんて思いもしなかった。これから先、どうなるかわからないけど、地に足をつけないと何もできない。沖縄に渡った今は、沖縄の地に足つけて生きてくしかないよね。

■心を強く、前へ

全国に避難している人みんな、さみしい気持ちでいると思う。自分が悪いわけでもない、目に見えない相手と自然災害にやられてる。心を折られないように、心を強くひとつにして前に進んでいきましょう。

浪江のこころ通信

・第3号・



平成23年3月11日に発生した東日本大震災、そして福島第一原子力発電所の事故により、福島県内外に分散避難した浪江町民。長期化する避難生活、先の見えない不安の中で、町民の皆さんがどのような思いで生活し、ふるさとへの思いを抱いているのか。

こうした町民の思いをつなげるために、“浪江のこころプロジェクト”が立ち上げられました。東北圏地域づくりコンソーシアム推進協議会（※）が中心となり、全国各地のNPO、大学等の皆さんが取材を進め、浪江町との連携のもと「浪江のこころ通信」が編集・発行されます。

浪江のこころプロジェクトは、分散避難している町民の皆さんの声を「浪江のこころ通信」を通してお届けし、ふるさと浪江町がかつての暮らしを取り戻すことへの願いとこだわりを発信・共有しようとするものです。

※東北圏地域づくりコンソーシアム推進協議会は、東北圏（7県）の地域コミュニティ再生や協働のまちづくりの推進を目的として、大学、NPO、企業、経済団体、行政等が連携したコミュニティ支援ネットワーク。仙台が本拠地。

「浪江のこころ通信」第3号への感想をお寄せください。

【連絡先】〒976-0904 福島県二本松市郭内一丁目196-1
男女共生センター内 浪江町役場二本松事務所
「浪江のこころ通信」宛
FAX.0243-22-4261





伊丹 希偉さん

取材者：特定非営利活動法人 市民公益活動パートナーズ 古山
取材日：8月6日

一番遠くの避難先から今、福島市に。 ようやくふるさとへ“半分の距離”

津島の自宅で震災に遭い、入院中の母親の搬送とともに、ご夫妻と息子さん夫婦の家族4人で原発事故直前に福島市へ避難。福島市から二本松市の避難所、親戚を頼って新潟県新潟市西区へ。さらに、4月半ばから耶麻郡磐梯町での二次避難を経て、7月末に福島市に転居した。



▲転居間もない福島市の自宅で、奥さまとご一緒に。

浪江町でも川俣町に近い津島で酒屋を営み、我が家で食べるお米や野菜を作りながら、空気も水も本当にきれいなこのふるさとで、心豊かに老後を送るつもりでした。

20年間、村おこしにも関わってきました。春から夏にかけては植樹やスポーツ大会、ビアガーデンなどを催し、11月には今年で21回を迎えるはずだった「いきいき夢まつり」を開いていました。予算は少なかったけれども、婦人会や交通安全協会、地元の会社、青年団など地域のさまざまな団体がそれぞれの得意なことを生かし、毎年、自慢のキノコの季節に手作りの祭りを行ってきました。この間、中ノ沢温泉（猪苗代町）にこの祭りのメンバーが集まることができ、1～2年くらいで戻れるならば再び祭りを興したいなどとふるさとの話をしてきました。

この福島市では、埼玉の私の妹のところに避難している母親もまもなく一緒に住むこととなります。祖母、私たちと息子夫婦の5人が再び一緒になり、浪江に帰れる日を待ち望んでいます。

浪江での生活を思い出してみると、本当に温かい人、思いやりのあるやさしき人が多かったなと思います。結婚を機に住み始めましたが、地域のさまざまな役、婦人消防隊長、保護司、結婚相談所所長なども担当させていただきました。私の楽しみにしていました。特に「十日市」は印象的。3日間のイベントの司会を担当させていただきました。震災が無ければ、今も浪江でいろいろな役を楽しんでいただいていたはず…と思うと残念でなりません。帰ったらま

たボランティアや行政のサポート、地域の方のお世話をしたりと相談にのりたいですね。国や行政機関にお願いしたいのは、方針を明示してほしいという情報を出して欲しいという事。これらが分からなければ自分はどうすべきか決められません。ぜひお願いします。現在はこのような状況ですが、空白の期間にしてはだめだと思えます。自分なりの仕事や楽しみを持ち、自分の人生の今を大切に生きていきたいと思います。



渡辺 智子さん

取材者：茨城NPOセンター commons 石川
取材日：8月13日

戻る日まで前を向いて

田尻の新築したばかりの自宅で地震にあった渡辺さんは、お子さん4人と会社員の旦那さまとの6人家族。8月に入ってから茨城県の日立市にある民間住宅に移って生活している。



▲渡辺智子さんとお子さんたち

自宅は新築したばかりで海沿いではなかったのに、地震の翌朝、町の防災無線で避難指示があり慌てて避難をしました。そこから福島市の体育館、ホテルなどを経て現在、3カ所目である日立市内の民間住宅に引っ越してきました。

住宅はもちろん、次女の新しい中学の制服や自転車、学校に置きっぱなしのお気に入りの洋服、近所の方々と交流などすべて置き去りにしなければならなかったのは残念です。

しかし、無邪気で明るい4歳の末っ子がいることで、避難所でも家族内でも暗くならずにいられました。でも、そんな彼女も緊急地震速報のアラームが鳴るとかなり不安がるので、あまり表には出さないけれどダメージが大きいのかな、とも思います。

浪江に帰れるならずっと暮らしていくつもりで建てた家なので片付けもしたい、近所の方々と友だちにも会いたいなあ。早く元の生活にも戻りたいし、大変なことも多いけれど、自分たちはまだ恵まれているほうだと思います。

戻って落ち着いたなら家を流されたりして困っている方を助けたいです。



木幡 豊子さん

取材者：地域社会デザイン・ラボ 遠藤
取材日：8月11日

一番の財産はボランティア活動で築いた絆。だから今の私がある。



▲仕事帰りに仙台駅前撮影

震災後、相馬の避難所、川俣町の親戚宅を経て、現在は以前に住んだことがある仙台市で、長男夫婦とともに4人で暮らす。今は市内でフルタイムの仕事を始め忙しい日々。休日は、浪江町在住時の知人や友人と会ったり、担当する役職の会合で出かけていることが多い。

今の学校は、前の学校と同じひとクラスだけ倍以上の人数がいます。友だちもたくさんできました。朝は7人の班で20分くらいかけて登校します。前の家のように広い庭で友だちと遊んだりすることはありません。休日は外で遊んだり、友だちの家に行ったり、隣の部屋に

今、お父さんは広野に、お母さんはいわき市に勤めに行っています。遠いのでちょっと大変そうです。浪江の友だちの連絡先をお母さんが知っているの、連絡をとって行き来もしました。また、みんなで遊びたいです。



▲左から竜巳くん、妹・日向子ちゃん、兄・隼太郎くん

横山竜巳、小学4年生です。浪江町請戸に住んでいました。津波で家は流されてしまい、浪江町は避難区域なので、新潟県へ避難した後にゴールデンウィークごろから茨城県北茨城市のアパートに家族5人で住んでいます。



横山 竜巳くん

取材者：茨城NPOセンター commons 天井
取材日：8月12日

また、みんなで遊びたい



鈴木 大介さん

取材者：元気玉プロジェクト実行委員会 江川
取材日：8月15日

自分たちの酒づくりを存分にやっていきたい

家族とともに山形県米沢市に住み、南会津の蔵元で、残された酵母から「壽」をつくった

震災後の津波で、自宅、蔵、仕込んだ酒、記録資料すべてを失いました。あときの光景は、自分でも忘れることのできない光景です。地震直後、消防車で避難誘導をしていました。大津波が迫り、いよいよ危ないというときに、消防車を取り捨てて高台へ避難しました。逃げ切れなかった人たちを避難指示によって捜索できなかったことが悔いに残ります。現在、手元にある酒蔵の写真はすべて、取引先が蔵見学時撮影したものが残っているだけです。取引先には、できるだけ蔵に足を運んで酒と風土を理解してもらっていたことが、残された写真となりました。ありがたいうちに自分たちの思い出が、人さまから伝わってくるのです。家族親戚で米沢に避難しました。すべてが流されて酒なんてつくれると思っていまへんでした。でも、あのころ（3月）雪がふって寒かったので、「まだ酒が造れるな。」という話をしていったんです。そのとき、前町のおつきあいのあった南会津町の蔵元で酒を1本仕込めるこ

とになりました。米は地元請戸で契約栽培をしていた同じ品種を用い、県の試験場に残っていた蔵独自の酵母で仕込みました。水が違うので全く同じ酒というわけにはいきませんでした。「壽」の味は出せました。7月上旬にできた酒は約2、000本余り。地元の方々に気持ちいいだけ、つなぐのに一杯だっただけに、「壽が飲みたかった。」といわれたときには涙が流れました。わが家は、1830年ごろから続く造り酒屋です。ずっと地元の暮らしに寄り添ってきた自負があります。自分自身も前勤務先のある奈良県から戻ったとき、浪江の良さをすぐ実感し、酒造りを通して他の文化圏に情報を発信できる立場によるこびを感じていました。暑すぎず、寒すぎず、季節ごとに豊かな恵みあふれる風土、人々の営みが懐かしくて仕方ありません。これから「酒づくり」を行なっていく上で場所の問題は欠かせません。まだ拠点探しの最中で、自分が思うような良い環境はなかなかありません。



▲南会津で仕込んだ「壽」は発売後すぐに完売



叶谷 勇郎さん・夕ケ子さん

取材者：特定非営利活動法人山形の公益活動を応援する会・アミル 齋藤・柴田
取材日：8月13日

お互いに苦しい不安な状況乗り越えましょう また浪江町で会いたいです



▲5月の一時帰宅の際に持ち帰った『漁船「万寿丸」』の船出写真と、夫婦一緒に。

3月17日にご家族10人で親戚を頼り山形県最上町へ避難。叶谷さん親子は請戸漁港の漁師。父勇郎さんの船「万寿丸」が津波に流されまだ見つからない。船の写真を大切にし、見つかることを願っている。息子の貴徳さんは浪江町野球チームの監督を務め、9月に行われる「福島県市町村対抗野球大会」に出場する予定。「こんなときだからこそ自分たちが野球を頑張ってる町の人々に元気づけてもらいたい。」と話す。

3月11日の地震の後、息子の貴徳は請戸港にある船を係留するためにすぐに請戸港に向かったが、道で偶然会った漁師仲間「津波だからだめだ。」と言われすぐに引き返し難を逃れることができた。12日の朝に防災無線で避難指示があり、川俣小学校まで家族10人で避難し、親戚を頼って山形県最上町に来た。2、3日経って落ち着いたら自宅へ帰れると思っていたので、こんなことになるとは思っていません。今不安なのは、先が見えないということ。故郷へ帰れるのか、それがいつごろなのか。震災から1カ月は精神的につらく、上を見ることができなかつたが、ここ数カ月は息子が重機の勉強をし大型特殊免許を取得したり、地元の漁協の会議に出たり、上を向き町の復興のためにできることを探していた。現在、息子は東京での仕事が決まり、9月から家族と離れて暮らすことになった。一度はあきらめかけた県の野球大会へ、皆さんの協力で熱い思いで参加することになり、楽しみにしている。

自分はやはり、また船長として海に戻り、浪江で暮らしたい。海から昇る朝日が懐かしい。これまで浪江で漁師として生活を築いてきて、息子に船を任せて頑張るべというときの震災だった。放射能さえおさまればまた漁に出られるとも思うが、漁業を再開して安心安全な魚を捕ることができると不安でいる。4歳と8歳の孫は、ときどき「おうちにかえりたい」「もうおわりにしよう」と言うが、2人とも避難先で小学校に通い友だちもできた。子どもながらたくさん我慢していると思う。最上町の皆さんはいい人ばかりで、散歩に行けばお茶飲んでいけと声をかけてくれたり、多く取れた野菜を持ってきてくださったたり、町役場の人もよくしてくれ、とても感謝している。いつまでもお世話になるわけにはいかないという気持ちがあるが、どこに帰るといいのかわからず、どうも悩んでいる。自分や息子たちにとっては人生設計ができないが一番つらいので、放射能に関する信頼できる情報が今は一番ほしい。浪江町の皆さん、ばらばらになつてしまつたがお互いに苦しい不安な状況乗り越えて、またきつと浪江町で会いましょう。

今回の震災後、たくさんの方の支援と応援を受けたことが、私の強いよりどころになり財産となつています。私たちの新しい酒造りは存分にこの思いを發揮した酒であること、浪江の復興そして文化継続に向けた場づくり、きつかけづくりに少しでも貢献できればと願っています。



志賀 雄一さん

取材者：特定非営利活動法人ビーンズふくしま 豊田
取材日：8月10日

浪江の文化活動の再開を祈って

みなさんのご支援を胸に、早く浪江に帰ってすきな歌を思いきり唄いたい

私は今、妻と92歳の母の3人で二本松の促進住宅で過ごしています。

大地震発生のとき、私たち家族は浪江町樋渡の自宅にいました。パソコンで作業をしていたところ、気がつくとき落ちてきた柱時計を抱いて横になっていました。まもなく防災無線で津波の知らせを受け、かけつけた妹と4人で山の中にある野菜直売所に避難しました。その日は妹の家に泊まり、次の日は原発事故の知らせで、そのまま4人で津島に避難しました。翌日の朝早く、川俣高校体育館に避難、妹は東京へ移動。私たち3人はここで2泊、翌日甥が迎えに来て仙台に移動。物資がほとんど無い中、アパートに半月ほど生活した後、4月から二本松市にきました。財布も免許証も持たず逃げて来たのに、今は沢山の支援物資をいただきながら生活



できることに大変感謝をしています。

今、望むことは、なんと言っても早く原発事故が収束して、愛する故郷へ帰ることです。これは浪江の町民のみならず、近隣の町民のみなさんが、胸が熱くなるほど望んでいることです。そして、一刻も早く町の復興の出発点に立たねばなりません。

私にとって残念なことが一つあります。私は浪江町芸術文化団体連絡協議会の代表を務めさせていただきながら、今は何もできないことです。そんな中、私の所属している合唱団員と一人一人連絡をなんとか取り合って、「合唱団だより」を発行することができました。さらに先日、福島市で交流会を開き、団員のみなさんと再会の喜びを分かち合うことができました。

浪江町には50団体を超える芸術文化団体があります。その団体の方々もあきらめずに、浪江に帰ることを祈念して過ごして欲しいと願っています。8月に浪江町の盆踊り大会が開かれたことは、大きな励みになったことと思います。町長をはじめとして職員のみなさん、商工会のみなさんお世話さまでした。

被災され、あるいは絶望の中にいる方もおられるかも知れませんが、近い将来必ず浪江町に帰る日が来ることを信じがんばりましょう。今はそんなところではないと言われる方も多いと思いますが、私は浪江町の芸術文化活動の再開を信じ、生活に励んでいきたいと思っています。



柴 孝一さん・タケ子さん・強さん・かおるさん

取材者：ちば市民活動・市民事業サポートクラブ 風間・鍋嶋
取材日：8月7日

生きていたら、きっといいことがある！

震災後福島県内を転々とした後、東京の親戚に身を寄せ、6回目にしようやく現在住んでいる千葉市稲毛区のマンション5階に移って来た柴さん一家。今は息子夫婦、3人の孫とおばの8人で暮らしている。



▲左から 孝一さん、孫の孝成くん、タケ子さん、かおるさん

孫が震災前のある日、「自分も名刺がほしい」と言うのでパソコンで作ってやりました。喜んでる姿が思いつかびます。今は、手元にありません。震災後、無垢の床板だけが残っている我が家の様子を映し

■震災でなにもかもが慣れない狭いマンション暮らし、周りの玄関は皆閉まっている中で、うちは浪江にいたときのようにも今も玄関は開け放っています。窓から玄関に抜ける風に、ふるさとの浜風の涼しさと気さくな近所の人たちとのやり取りを思い出します。これまでずっと働き詰めで、やっとなつくりできると思っていた矢先、震災で被災しました。老後の暮らしと孫の将来を考えて建てたばかりの家も、お墓も、そして天秤を担いで行商していたころから代々受け継がれてきた水産会社の工場や大量の在庫が入った冷凍庫、会社の車、長年注文をくれていたお客さんのデータも何もかもすべてを無くしました。会社は、息子が4代目として小学5年の孫が5代目として続いていくはずでした。その孫が震災前のある日、「自分も名刺がほしい」と言うのでパソコンで作ってやりました。喜んでる姿が思いつかびます。今は、手元にありません。震災後、無垢の床板だけが残っている我が家の様子を映し

■何枚かの写真だけです。■久しぶりの再会
先日、子どもの小学校の卒業式があり久しぶりに福島のみなさんと再会しました。みんなばらばらになったけど、子どもたちの気持ちはつながっていると感じました。会っている時間はとても短く感じ、改めて「請戸」を実感しました。そして、今は千葉で働きながら「浪江では、今頃はこんなことをしていたな。」って思います。それはふるさとでのちりめんじやこや小女子の作業やお中元やお盆の忙しさに追われながらも穏やかな日々。これから子どもたちのためにも頑張らなければと思います。

■ありがたいと思う日々
震災当時は多くのお客さんや取引会社の方々が心配して電話をくださったようですが、無事であることを伝える手だてさえありませんでした。こちらから連絡することはできませんでしたが、今は、千葉や埼玉のお客さんが心配してお米や野菜を持って来てくれたり、同業者や築地の方々がおい舞いにくれたり、本当にありがたいと思います。

家族が無事でいられたこと、親戚の助けがありたく、これから先はどうなるか解らないが、「生きていたら、きっといいことがある。」と信じています。

最後に、「浪江町役場および自治体の方々も一生懸命にお仕事をされておりますが、お体を大切に頑張ってください。」と伝えたいです。



半谷 秀辰さん

取材者：NPO法人市民公益活動 パートナース 松田
取材日：8月6日

復興したら 笑って酒が飲みたい



▲避難している北塩原村のコテージ前にて

大堀地区に暮らして25代目、祖先が焼き物をはじめ15代目を数える、大堀相馬焼協同組合の組合長さん。福島市や茨城県の親戚宅を経て、日ごろから信頼し、相談相手でもある窯元さんが避難していた北塩原村へ移りました。娘さんとの春に大学へ進学した息子さんは東京に住み、奥さんとご両親の4人暮らしです。

342年もの伝統を持つ大堀相馬焼きの里には、昔からのコミュニケーションが脈々と受け継がれていた。

伝統とは、地域の文化であり、地域のつながりだと考えている。だから、震災と避難のために、その絆が壊れてしまったことは、とても残念でならない。

大堀地区は、米がおいしく、高瀬川渓谷の眺めときれいな水があり、空気は澄んで、蛸が乱舞するとても素晴らしいところで、ひとことでは言い表せない愛着がある。

平成14年に開館した「陶芸の杜おほり」の周辺には、桜や紫陽花、さるすべりなどの木を植えて、手入れをしてきたところだけだけに、悔しい思いで仕方がない。

また、昔から船乗りの守り神とされ、請戸の港に戻る際の目印とされた「戸神山」には十二支（干支）の石像が祀られていたが、損傷が激しくなっていたので、仲間たちと干支を描いた陶板を焼いて100kgを超える自然石にはめ込んだ新たな十二支像を作成した。急な登山道沿いに力を合わせて設置したことも懐かしい思い出だ。

こうして、地元の話をしてると地域のみんなの顔が浮かぶ。実際に仲間の顔を見て話しができたら、きつと元気でやり直せると信じている。

千年に一度の大災害というが、以前の大堀地区を取り戻し、いつか復興したならば、つらいことも思い出話にして、みんなどうまい酒を酌み交わしたい。



原中 貴弘さん・君枝さん

取材者：(特活)新潟NPO協会 富澤
取材日：8月22日

いつかゆっくりと浪江町や実家のあった 請戸を娘と歩きたい



▲助産師さんから習った「生け花」の前で、原中さんご一家。

震災発生時、臨月だった君枝さん。新潟市内の病院にて、菜乃巴ちゃんを出産。貴弘さんと貴弘さんのご両親、君枝さんのご両親は一時、新潟市北区の避難所で過ごす。菜乃巴ちゃんのことを考え、3人で新潟市に移住を決意。

出産予定が3月だったため、妻だけ震災直後、新潟市の市民病院に入院しました。私と私の両親、それから妻の両親は、数日後、新潟市北区の避難所に行き、しばらくそこで過ごしました。今後、私の両親は、新潟市から宮城県亘理町で、妻の両親は東京から南相馬市で暮らす予定にしています。

出産時は、新潟市内のある助産師さんとの出会いがあり、体も心もサポートしてもらいました。産後、妻の体調を気遣って、その方のご自宅に一週間お世話になりました。娘の菜乃巴は、食道閉鎖症で生まれ、翌日に手術をし、退院は一カ月半後でした。その間もお見舞いに来てくれたり、お知り合いの方を紹介してくれたり、妻と娘の菜乃巴を実の娘と孫のように可愛がってもらい、現在も深い交流があります。

今不安なことと言えば、新潟の冬、雪のことでしょうか。二人とも浪江町出身なので、雪の生活には慣れていないですね。それから、地元の方と話をしたいという思いがあり、地元福島県のナンバープレートを見たりすると、つい駆け寄りたくなります。この前は、逆に声をかけてもらい、浪江出身の方にお

会いました。

新潟県は、水害、地震と度重なる災害にあった経験があるからなのでしょうが、とても素早い受入れ体制をとっていただき、大変感謝しています。子どもの出生届と一緒に、私たち夫婦は新潟市に住民票を移しましたが、市からさまざまな情報が届くので、今の暮らしに不便はないです。逆に情報が豊富で、何を選んだらいいか困ったときは、助産師さんに相談しています。

浪江町の情報は、インターネットで調べたり、福島県内にいる友人などから電話で教えてもらっています。しばらくは新潟市で暮らすことを決意しましたが、いつか娘を連れ、ゆっくりと浪江と実家のあった請戸を懐かしんで歩ける日が来ることを強く願っています。そのためにも、町の情報はこれからもずっと受け取りたいです。

今回の震災で、ふるさとのことをとても尊く感じました。県外にいる私たちの思いや提案を受け付けてもらえる機関を設けてもらい、絶えず呼びかけていてほしい。もう誰一人悲しむことなく孤立することがないように。そう願ってやみません。



石井 悠子さん

取材者：ちば市民活動・市民事業サポート
クラブ 風間・鍋嶋
取材日：8月5日

いつかまた、家族みんなと一緒に暮らしたい



震災前、4世代同居の家族10人で生活していた石井さん一家。現在は、相馬市、二本松市、ひたちなか市(茨城県)、市原市(千葉県)の4カ所に分かれて避難生活を送っている。

4月2日から夫の博和さん、7歳、4歳、3歳の子どもたちと市原市の団地で生活中。

私は、職場で震災にあい、一度も家に戻らず福島県外に避難しました。同じ浪江町に嫁いでいた妹が臨月のお腹でしたので、とにかく早く遠くへ避難したかったのです。はじめの3週間は、叔母の暮らす埼玉に全員で避難しました。妹は、3月24日草加市立病院で男の子を無事出産、これからの日本に思いを込めて大和と命名しました。

小学校2年生の長男、秀人は、1年間通った幾世橋小学校への思いからか「新しいランドセルはいや。」と言うので、浪江町の自宅に夫が一時帰宅した際にランドセルを持ち帰りました。今では友だちもでき、

サッカークラブにも入部、少しずつ千葉での生活に慣れつつあります。

蛭が飛びかい、子どもの好きなカブトムシがいっぱい採れた自然豊かな浪江町。祖母お手製のもろみに鮭やきゅうりを漬けて、祖父が作ったお米のご飯とともに、おいしく食べたことなど思い出します。浪江町には思い出がたくさんあります。小学校、中学校、高校といっしょにソフトボールをやった仲間や近所の人たち、親戚…会いたい人は、たくさんいます。

慣れない団地住まいで、子どもたちが部屋で走り回るたびに、上下の部屋に住む方々に迷惑にならないようにと、気遣いをしています。でも、大人のふんばる姿を子どもたちに見せることが、いつか子どものためになると信じています。今回の震災での困難は、乗り越えられる試練と思っています。

いつかまた、家族みんなと一緒に暮らすことができたらと願っています。



村岡 由果さん

取材者：中越沖復興支援ネットワーク 水戸部
取材日：8月17日

今いる場所は違うけど、 浪江のことを忘れず生活したい



▲村岡さんと長女 蓮果ちゃん(左)、次女 果音ちゃん(右)

地震発生時、幼稚園に子どもを迎えに行っていた村岡さんは、子どもの安否が第一に頭に浮かんだ。幼稚園の誘導で無事に避難していた子どもたちと夫、親族とともに避難所を転々としながら、現在は新潟県柏崎市で生活している。

大きな揺れに襲われたのは長女の蓮果を迎えに行く車中、ちょうど信号待ちをしているときでした。「早く迎えに行かないと…」揺れがおさまってすぐに幼稚園に向かいましたが、蓮果はいませんでした。車で周りを探していると、ちょうど幼稚園の先生に会って、娘が高台に避難していることがわかりました。無事だった子どもたちとともに、その日は家で寝ることにしました。翌日朝から家の片付けをしていると避難指示が出て、そのときはちよつと出かけるくらいは気持ちで服などを持って逃げました。その後

津島、本宮を経て新潟県柏崎市西山に避難しました。夫とともに一時帰宅をしたとき、草木が無造作に伸びきっている町を見て「たった5カ月でこんなことに；何年も経ったらどうなるんだろう。」という不安を感じました。いつ戻れるかわからないし、先のこと何かわからない。でも、今いる場所は違うても浪江のことを忘れずに生きていきたいと思っています。

最後に、請戸の児童館の先生方、娘を迅速に避難誘導してくださり本当にありがとうございます。